



聖歌集改訂ニュース

「朝の礼拝」を歌いましょう！

今回の総会期から聖歌集改訂委員会の委員長になりました。よろしく申し上げます。古本純一郎主教は長年にわたり委員長として、わたしたちをまとめ、導いてくださいました。心からお礼申し上げます。とは言いますが、同師父は首座主教のお仕事とともに、これまでのご経験・ご造詣を生かして、詩作という重要な作業に協力委員として引き続きご奉仕くださいます。

かつて世界聖公会の中には、主日に司祭がいる時でも「朝の礼拝」がささげられる、という習慣の教会がありました。日本聖公会の場合も同様でした。しかし、20世紀初頭に始まった世界的な礼拝(典礼)改革運動・リタージカル・ムーブメントの結果、初代教会の礼拝のあり方が回復され、主日には「感謝」という名の礼拝すなわち聖餐式が必ず執行されるようになったのです。ところが最近、これまでとは別の意味で、主日に「朝の礼拝」がささげられる場合が大変多くなってきました。司祭の数が全世界的に、また日本聖公会でも減少してきたため、複数の教会を司牧する必要に迫られ、教会の主体である信徒団が聖餐式をささげるために奉仕できなくなってきたのです。

朝の礼拝の源は、中世以来、一日にささげられる八つの礼拝にあります。これらは聖務時禱(オフィス)と呼ばれ、16世紀にローマの支配から離脱した英国の教会(聖公会)は、トマス・克蘭マー大主教によって礼拝の改革を

行いました。重要な一つの成果が、八つの礼拝の内の三つ、つまりマティンズ(午前2時)、ローズ(夜明け)、プライム(午前6時)から「朝の礼拝」を、そしてヴェスパース(日没時)、コンプリン(就寝時)の二つから「夕の礼拝」を作成し、一日の礼拝を充実させたことです。これらの礼拝式はその後全聖公会において世界的に用いられてきました。

聖餐式の代わりに信徒により主日にささげられるこの「朝の礼拝」は聖務時禱ではありません。近年、他の礼拝諸式と同様に、礼拝(典礼)改革運動の中で、イエスにおける神の救いへの感謝、自らを共同体として認識する教会、神の支配する世界への宣教、その他大切な要素が生かされ、内容が現代的になってきています。式文を熟読し、感謝あふれる礼拝としましょう。そのためには、朝の礼拝の賛歌(カンティクル)あるいは式全体が、祈禱書に記されているように、「歌われること」が大切です。そのため委員会では、文語祈禱書のときのように準備し、どの教会でも歌ってささげることができるように、努めています。「うちの教会は小さいから無理」とあきらめないでください。まず、「ザカリヤの賛歌」のみでもよいでしょう。楽器がなくても大丈夫。皆で試みてください。そして次第に歌う部分を増やしていくようにしたらどうでしょう。

皆さんと一緒に良い聖歌集を作っていきましょう。
(委員長 主教 森紀旦)

京都教区「礼拝セミナー」報告

今年の3月19日～20日にかけて教区宣教局礼拝部主催で～豊かな聖餐式をおこなおう～と称して「礼拝セミナー」が開かれました。

京都教区では礼拝部の中に礼拝音楽委員会が設けられています。それは「礼拝」と「音楽」は切り離すことのできないもの・・・との観点から、委員会設置当初からの方針であります。

今回のセミナーでは主題講演「聖餐式のこころ」(笹森伸児司祭)に始まり、その後、オルター・ギルド、アコライト、オルガニスト、聖書朗読、信徒奉仕者、アッシャー・代祷といった、礼拝を支える様々な角度からの分科会をもち、最後にそれぞれが学んだことを分かち合う「まとめの聖餐式」をささげました。

今まで、各パートに分かれてのセミナーは何度かありましたが、全体を網羅した研修会は初めての試みで、各地の教会から60名近い参加者がありました。セミナー全体を通しての主題は、笹森司祭の講演にあった「聖餐式は司祭だけでは捧げられません。大切なことは会衆という役割をテークパートすること。さらには、司祭との意志疎通が何よりも大切である。」という言葉に集約されるように、聖餐式における意味づけが明確に示されたセミナーであったといえるでしょう。参加者からは、「それぞれが学んだことを出し合う聖餐式。自分が参加していない分科会の内容も聖餐式を捧げるなかで理解することができた。」などの声が聞かれました。

聖餐式における「音楽」の役割は非常に大きいと言えます。随分前にのこと、私がオルガニストをしていたときに、ある人に言われました。「礼拝を支えるのも壊してしまうのもオルガニスト次第・・・。オルガンを弾くのを止めれば礼拝はとまってしまう。それほど、オルガ

ニストは大切な役割を担っている。」少し、乱暴な表現ですが、核心をついた指摘として聞き流すことはできませんでした。

教会のオルガニストは大方の場合、音楽のプロが務めているわけではありません。技術面においても音楽観においても、また礼拝観においてもそれぞれ持ち味が違います。ゆえに、その悩みは人それぞれであり、本来は個別にその援助をしていく必要性もあるのでしょう。

「皆が知らない聖歌だから、歌えないなあ」「じゃあ、どうやったら歌えるようになるのだろうか」「礼拝の前か後に練習してみませんか」・・・というようなことや「伴奏が難しいなあ」「じゃあ、メロディーラインだけ弾いてみる？ これだって立派な伴奏になるよ」「礼拝のなかで歌う位置は？司祭さんと確認してみよう」などなど・・・さまざまな援助が現場で生じてくることでしょう。また、チャントの伴奏等においては、何よりもオルガニスト自身が礼拝の流れや意味をよく学び、司祭とのコミュニケーションをとることが大きな責任として出てきます。困ったとき、わからないときにはお互いに話し合える関係づくりも大切です。そのようなコミュニケーションを信徒全体が支えていけるような教会の在り方も重要であると考えます。

会衆席にいる人も「わからない」「歌えない」「なじまない」といったマイナス面ばかりでなく、「礼拝を支える一人として、今参加している」ことを意識したいものです。

要は、礼拝における「音楽」は決してオルガニストだけのものではなく、会衆と司祭と共に創りあげていくものであるという視点に立つことです。このことを教会全体の共通理解としてもつことは、きっと豊かな礼拝を捧げることに繋がると思います。

(司祭 大岡 創)

【今号の添付聖歌について】

今回は委員による創作と翻訳をいくつかまとめてお届けいたします。どれも、改訂委員会で厳正な審査を経た上で試用版に含まれることになった聖歌です。なお、今回添付の楽譜は試用版の予定サイズ(A5版)の原寸です。

「古いおこないあらためて」

主日に行われた洗礼式で、オルガンを弾いているときに浮かんだ詩をまとめたものです。

その日は赤ちゃんと大人の方々の洗礼でしたが、イエス様がヨルダン川に自ら身を沈められたように、赤子であろうと大人であろうと何人も洗礼の水によって清められ、神様から頂いたまったく新しい衣を身にまとうのだ、という厳粛な思いが、強く私の心を捉えました。(青木瑞恵)

「さんびする喜びと」・Sing Hosanna

私が初めてこの曲に出会ったのは、清里で開かれた横浜教区の大家族キャンプの折りでした。たまたま来日していた英国レスター教区の人々も一緒に、高原の抜けるような青空の下で歌ったときの楽しかった思い出は忘れることができません。軽やかなリズムとわくわくするような明るい聖歌は、古今聖歌集の中で今まで歌ってきた聖歌とは少しおもむきを異にし、大変新鮮な気が致しました。

日本語の詩に直すのも、気持ちが乗っていたせいか、案外スムーズでした。おりかえしの部分は、英語のままで残そうかとも思いましたが、新しい日本語の聖歌ということ意識して、やはり日本語で訳をつけました。英語で歌うときのような軽快でリズムカルな響きが失われていないことを願いつつ、喜びをもって歌って頂けたら幸いです。(青木瑞恵)

この曲は英国で1970～80年代から歌わ

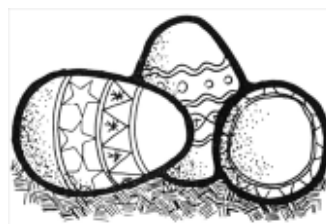
れるようになり広く愛されるようになりました。一般的な賛美・感謝の聖歌として、また結婚式の聖歌として歌われることも多いようです。(鈴木隆太)

「主を求めよ」

この歌は西原廉太司祭の発案で、日本キリスト教協議会(NCC-J)の2000年度総会期の主題聖句「主を求めよ、そして生きよ」(アモス書5章6節)から書き下ろしました。NCCの会議や礼拝、集会等で用いることを意識して元気の出るような歌を作りましたので、礼拝堂だけでなく野外で歌っても映える曲調だと思います。

人は時代や場所を越えて真に神をたずね求める時、そこにこそ「いのち」が輝き出され世の闇は照らされる、という信仰宣言をおりかえしとして前後に置き、1節では声にならない苦悩の叫びを聞き取る神の正義、2節では神の恵みを分かち合うことによる平和、3節では主イエス・キリストがあらゆるいのちを回復させることを、それぞれ歌っています。

(宮崎 光)



「手をのばして主にふれよう」

・増補版 39番

横浜教区礼拝音楽研修会で1節のみ仕上げられたこの歌の原詩を読んでいくうちに、これは1節だけで終わってしまっただけでは意味が十分に伝え切れない、特に3節に聖書のみ言葉がそのまま載せられているのを見て、最後まで訳をつけようと考えました。

「手をのばして…」という1節の歌詩があったので、それにならって2・3節の出だしは案外たやすく付いてきましたが、3節の出だしの「耳」という言葉をはじめの八分音符2つに分けるか、次の小節にまたがって「みーみ」とするかでは論議を呼び、外国の楽譜に日本語を載せる難しさを改めて学びました。

(青木瑞恵)

「かみのめぐみは」

この聖歌は、実は私が妹たちの聖婚式のプレゼントとして書いたものです。それまで聖歌の曲を書くことはあったものの「日本語の抑揚とメロディーの一致」という点で悩まされることが多く、それならば、と初めて詩も書いてみたのがこの作品です。1～3節が各々父・子・聖霊を表わしているつもりなのですが、毎節出てくるフレーズ以外は、詩と曲の抑揚を合わせることはできませんでした。でも、詩を実際に書いた経験が、改訂委員として詩を見るときに実に役立っています。「書いてみなければ判らないこと」って、あるものなんです。

(鈴木隆太)

【新しい委員が加わりました】

この総会期から委員の顔ぶれが一部代わりました。新委員を含めて、委員をあらためて紹介させていただきます。(五十音順)

- 青木 瑞恵 (横浜教区)
 司祭 大岡 創 (京都教区)(今総会期より)
 加藤 啓子 (東京教区)(改訂ニュース)
 鈴木 隆太 (横浜教区)(書記)
 司祭 竹内 謙太郎(東京教区)(広報)
 司祭 松岡 虔一 (大阪教区)
 司祭 宮崎 光 (東京教区)(今総会期より)
 主教 森 紀旦 (中部教区)(委員長)

【読書紹介】

大変役に立つ便利な本を二冊ご紹介しましょう。一つはJ・ハーパー著『中世キリスト教の典礼と音楽』(佐々木勉・那須輝彦訳、教文館)です。「中世」というとかなり昔の、しかもまとまった短期の時代を想像しがちですが、実際は10世紀から18世紀までの典礼(礼拝、式文)と、それがいかに歌われたかを入門的に述べたものですので、“ついこの間までの事柄”が扱われていると言えます。

「訳者あとがき」にも記されているように、現在日本では、中世ルネサンスの音楽、バッハ、ヘンデルその他たくさんのキリスト教音楽が、教会の人はもとより、一般の人々に聴かれています。真実にそれらを理解し味わうには、時代背景、礼拝の内容など基本的・本質的なものの知識が必要であり、本書にはそれを提供したいという意図があります。

そのため、初代教会から述べ始め、これらの時代にある程度厳密な完成を見た典礼、すなわち中世の教会暦、典礼書、詩編の使用、一日の八つの礼拝、ミサ(聖餐式)、聖週と復活祭などが詳細にしかし分かりやすく解説されます。さらに、16世紀の宗教改革期を経て、それらが新たな展開を示したトリエント式典礼と英国国教会(聖公会)の祈禱書について具体的に説明されます。

礼拝と音楽に強い関心のある人は、著者の熱意あふれる解説に引き込まれてしまうでしょう。ついこの間までの典礼と音楽がいかに多くの人々により、多様な文化の中で、また信仰的思いの中で結実していったかを納得させられ、現在の私たちの礼拝と音楽が引き継いでいる中世的背景を十分に知ることが出来ます。当時の式文などすべてにラテン語が付されていることが理解を深めるのに役立ち、

とても貴重です。

16世紀以降、成文で礼拝をささげる方向を進めたのは、ローマ・カトリック教会と聖公会のみといっても良く、第11章の英国国教会の典礼の部分は、聖公会に属するものとして熟読しておきたい箇所です。ただしここを読むときは、『共通祈祷書』と訳されているものは『英国聖公会祈祷書』のことであることを踏まえ、『38年版日本聖公会祈祷書』を傍らに置きつつ目を通すと大変分かりやすくなります。なぜならば、現行の前の文語祈祷書つまり『59年祈祷書』は、同じ文語祈祷書とは言え、「ついこの間までの」古い時期に属するものではなく、実にローマ教会の典礼刷新(第2バチカン公会議)に先立って、もちろん全世界聖公会に先立って、初代教会に戻り、礼拝(典礼)改革運動(20世紀)の成果を取り入れたいわば新しい祈祷書に属するからです。『38年祈祷書』はまだ教会に多く残っており、『第2祈祷書』(1552年)を受け継ぐもので、多少の改訂を施した『第5祈祷書』(1662年)の流れの中にある翻訳祈祷書だからです。

本書は、英国の場合を例にとり説明しているので、私たちには親しみやすくなっています。何度も繰り返し例として取り上げられる「ソールズベリ式典礼」は「セーラム用式」のことで、これが基となって全聖公会の祈祷書は出来あがりました。巻末の「教会用語集」は簡潔で便利。訳者に感謝します。(3800円)

森紀旦著『主日の御言葉 教会暦・聖餐式聖書日課・特祷』(聖公会出版)は聖公会員全員に必要不可欠の本です。礼拝をささげる神の民のほぼ全員が信徒です。その主体である信徒が「自分たちの礼拝」をささげるために、今過

ごしつつある「教会暦」の節の意味は何か、なぜ今日この「聖書箇所」を担当して読むのか、毎主日変わる「特祷」はどのような深い歴史を持ち、聖公会の霊性の源となってきたのかを、やさしく解説したものです。現行祈祷書(1990年)と同時に発行されるべきだったのですが、その後これらの分野が世界大的な進展を見せたため、その成果も含めて10年後の本年刊行された次第です。「ですます調」で記されていて、大変親しみ深いものです。また、読者の関心に従い、どの部分から入っても読めるように工夫されています。

まず初めに、前著紹介でも触れた『59年祈祷書』(文語)と比較して「現行祈祷書の特徴と教会暦」が述べられ(序論)、次いで「聖書日課の歴史」が語られます(第1章)。この章は前著の中世時代を含め、その前の時代のことでも詳しく記されます。1969年の第2バチカン公会議の成果として発表された「3年周期聖餐式聖書日課」は、諸聖公会や、プロテスタント諸教会にも大きな影響を与え、次第に各教派共通の聖書日課作成へと進んでいきますが(1992年まで)その過程が第2章、第6章で紹介されます。1990年に日本聖公会がアメリカ聖公会祈祷書から採用した「3年周期聖書日課の解説」が第3章です。つまりここが本書の中心部分の一つなのです。降臨節から始まって降誕節、顕現節、大斎節、復活節、聖霊降臨後の節という1年間全体にわたり、各節の教会暦の意味とA年、B年、C年の旧約聖書・使徒書・福音書相互の関わりが簡潔に叙述されています。もう一つの中心である「特祷」も、その歴史から説き起こされて、構造、聖書日課との関わりへと進み、主日に唱えられるすべてに手軽な解説がつけられています。

聖歌を選ぶとき私たちは大変気を使います。今歩んでいる教会暦の意図を知らなくてはな

りませんしその主日に朗読される旧約聖書・使徒書・福音書の内容も知らなくてはなりません。2月2日の被献日が過ぎても、顕現節だからといって、「三人の博士」の聖歌を用いるのは奇妙な感じがします。また、聖霊降臨後の節に三位一体主日の聖歌が歌われる場面にしばしば遭遇しますが、これは『59年祈祷書』の三位一体節がまだ記憶に残っているためでしょう。三位一体主日の聖歌はいつ歌ってももちろん良いのですが、特定の節に集中しないことが大切です。また、一年最後の主日も聖書日課から「王であるキリスト」の主日という意味があるように、それぞれにふさわしい聖歌の選択が重要です。それらも本書には分かりやすく書かれていますから、聖歌選択者やオルガニストには大いに助けとなります。

聖書、礼拝に関する図版も楽しめます。巻末の「聖書朗読箇所索引」は大変便利で、人名・地名索引と事項索引から本書の内部に入っていくのもよいでしょう。いつも机上におき、事あるごとに開きたい一冊です。(2800円)

(F)



【聖歌集探訪】

今回ご紹介するのは、カナダ聖公会の最新の聖歌集 "COMMON PRAISE" です。

カナダ聖公会の最初の聖歌集は1908年に出版された "The Book of Common Praise" でした。この聖歌集は38年に改訂され、ブルーブックの通称で永年親しまれてきました。現行古今聖歌集の編集に際してもこの聖歌集は重要な参考資料となり、ここから翻訳されて現行古今聖歌集に取り入れられた聖歌も少なくありません。

71年にはカナダ合同教会と共同で "The Hymn Book of the Anglican Church of Canada and the United Church of Canada" (通称レッドブック) が出版されましたが、その後85年にカナダ聖公会が『併用祈祷書』を採用した結果、新しい教会暦や宣教理念へのより深い対応が必要となったことから新たな改訂が決議され、98年秋に出版されたのが "COMMON PRAISE" です。

769編の聖歌が含まれているうち676番までがいわゆる聖歌で、677番以降の93曲はサーヴィス・ミュージック、つまりチャントの部となっています。詩・曲とも新しい、現存する作者のものが非常に多いことが一つの特徴である他、テゼ共同体、アイオナ共同体、アジアやアフリカ諸国の聖歌も少なからず収める一方で、いわゆる「クラシック」な聖歌もきちっと押さえている、非常に完成度の高い聖歌集です。チャントの部も38年ブルーブック以来親しまれているマーベックのセティングの改訂版の他、出版時には30代の作曲家の作品も含む新しいものが多数取り入れられています。

カナダ聖公会の信徒には英語を日常語とする人が多くはあるものの、多民族/多言語国

【改訂委員会から】

まず本年中に出版を予定している試用版の正式名称が『改訂古今聖歌集試用版』と決まったことをご報告します。結果的に「何の変哲もない」名称に落ち着きましたが、本格改訂聖歌集が『改訂古今聖歌集』と決まったわけはありません。本格版の名称についても引き続き、皆さんの考えをお聴かせ願いたく思っています。

去る5月23～25日、日本聖公会センターを会場に日本聖公会第52(定期)総会が開催されました。総会によって立てられている当委員会は総会に作業状況を報告しますが、今回は『改訂古今聖歌集試用版』(総会報告時は『改訂聖歌集試用版(仮称)』)の内容のうち既に作業を終えたものを、楽譜部分を除いた形で「別冊資料」として報告いたしました。議場ではこれに元、祈祷書の言葉が口語調になっているのに対応する意味で、試用版の聖歌の文体についての質疑もありました。

委員会では、「聖歌の言葉は詩である」ということを共通の認識として持っています。限られた字数の詩形のなかでの表現というのが詩の特質であり、聖歌についても定型詩として、文語的表現が混じることはあります。このことは現代のポピュラーソングの作詩にもみられます。わざわざ難しい表現を用いる方向性はないものの、委員会としてはそのようにして醸し出される「詩としての美しさ」を重視しつつ、現代の各世代の人々が理解できる言葉遣い、ということをも基準として作業をしています。

総会後の委員会は、実作業のための小委員会を名古屋、東京、横浜などで頻繁に開催してチャント、聖歌の詩、聖歌の曲といった各々の検討作業を行ない、その結果を全体委員会に持ち寄り、という形で作業を進めています。新メ

ンバーによる全体委員会は6月に2日間、8月には3日間続けて、京都教区センターで開催されました。また、委員の変更に伴い、電子メールを使える委員がほとんどになったことから、電子メールによるいわば「ヴァーチャル会議」も多く行なわれるようになってきており、委員間の連絡の徹底に大いに役立っています。

編集作業と平行して、印刷会社との打ち合わせも行なわれています。『試用版』の印刷は祈祷書、現行古今聖歌集と同じ河北印刷株式会社をお願いすることになり、現在コンピュータによる楽譜版下作成についてのやりとりや装丁の相談などが進んでいます。

委員会では毎年秋に「教区礼拝音楽担当者会」を開催しています。各教区の礼拝音楽担当委員と聖歌集改訂委員が一堂に会してお互いに報告、議論などを深めるこの催しは、昨99年名古屋、98年横浜、97年京都、と各教区で順番に開催しているものです。第6回になる本年は12月1～2日、北関東教区・大宮での開催が決定いたしました。毎年開催地を変えているのは、開催教区での礼拝音楽・聖歌集改訂への関心の高まりを期待しているためで、昨年名古屋でも多くの関心ある方々が、傍聴という形式でご参加くださいました。

以前に本欄でも予告したとおり、聖歌第三次公募と朝夕の礼拝のための礼拝式文用曲譜の作曲公募が始まっています。各教会にはポスターなども送られておりますので、応募の如何に関わらず広くこの公募について知っていただき、関心が高まることを委員会では期待しています。(文責 鈴木隆太)

発行：聖歌集改訂委員会

ご意見・ご質問は日本聖公会管区事務所まで
〒162-0805 東京都新宿区矢来町65
TEL 03-5228-3171 FAX 03-5228-3175
E-mail:hymnal.po@nsskk.org